

北村は神社で扱う舞楽人形や舞楽面、干支土鈴など、神社陶器専門の制作者だ。舞楽人形や舞楽面は、お参りに来た皇族や国内外の要人などに、記念品として贈るために神社が制作するもので、一般には販売されていない。土鈴は、神社が境内でお参りに訪れる一般の人たちにお札やお守りなどと一緒授与（販売）するものだ。

北村はこれらの製品を専門に企画、制作し、全国の神宮など40以上の神社に納めている。

北村は父親が創業した「いつき陶苑」の2代目。父親は特攻隊の一員として終戦を迎え、故郷に戻った後、愛知県瀬戸市で陶器づくりをしていた戦友に誘われて始めたのが、「いつき陶苑」を設立したきっかけだった。

父親が小さな陶器人形や土鈴の企画やデザインをし、友人が瀬戸市の窯で焼いて、伊勢神宮へ参拝に集まる人たち向けに、みやげもの店などで販売していた。

特攻隊帰りの父親が
神社陶器づくりを始める

最初はあまり売れなかったが、4、5年が経過したころから、いくつもの

匠たち
まちの



神社陶器の企画・制作者
北村純一さん（三重県明和町）

神社向けに 舞楽人形や 土鈴などを制作

新しい商品を
つくり続けることで、
新しい技術が
生まれてくるんです。



ヒット商品が生まれた。それに伴い、模倣品も出回るようになり、新商品の開発の難しさを強く感じた。ちょうど昭和48年には、20年に一度行われる伊勢神宮の遷宮の祭礼があり、全国から多くの参拝者が訪れたころだった。当初は神社向けと一般向けの陶器を制作していたが、「どっちつかずになる」として、神社向けの陶器を専門に制作するようになった。

学校を卒業してサラリーマン生活をしてきた北村は、27歳の時に実家に戻り、父親と一緒に陶器づくりを始めると、「父が体調を崩し、入退院を繰り返していたのを見て、後を継がなくてはと思った」のが父親の仕事を継ぐと決心した動機だった。

舞楽人形は十二単じふにたねをつけて、実際に舞ってもらって写真とビデオに収め、それをもとにデッサンし、神職からの細かい注文を取り入れながら、舞っている顔、姿を忠実に再現していく。北村が描いたデッサンをもとに、原型師といわれる職人が生土で人形の原型をつくる。そこから石膏をつくり、粘土を石膏に流し込んで人形の姿をつくり、それを窯で焼いて最後に絵付け職人が筆で彩色して完成する。

人形は20センチメートルから大きいものでも30センチメートルの大きさで、企画して完成するまで3〜4カ月を要する。北村はデザイン、デッサンを受け持つが、窯元に向いて全工程を厳しくチェックする。

日々の仕事を通じてデザイン、
デッサンの技能を習得

とくに、デザインやデッサンを学んだわけではない。父親や職人たちと一緒に長年、仕事をする中で身につけてきたものだ。

「神職さんと何度も意見を交わす中で、デッサンを起こし、舞楽人形や土鈴の形をつくり上げていくんです。神職さんに教えられ、育てていただいたんです」と、北村は控えめに語る。舞楽人形づくりでは、神社によって衣装の形や色が微妙に異なるため、「それを忠実に再現するのに非常に苦労します」。

干支土鈴は毎年、自分の頭の中でデザインを考え、神職と相談しながらデッサンし、それをもとに干支の形をした鈴をつくり上げていく。干支土鈴は一部、注文を受けた神社の砂を混ぜてつくる。「神社向けの干支土鈴は、



北村の父親が最初に制作したのが始まり」だという。

「いつき陶苑が最初に土鈴を制作した時の干支は、亥^イでしたが、つくり始めた時から4回^イりしてしまいました」。北村は感慨深げに話す。時々、「神社からいただいた干支土鈴を壊してしまったので、同じ干支の土鈴はありませんか」という問い合わせが入る。

そんな時は、「見本としてつくったものがあれば、それを分けてあげます」と、顧客への気配りも欠かさない。

今年^イは寅年、威厳を持たせた
土鈴に仕上げる

今年^イは寅年なので、「威厳を持たせ、強く見えるような土鈴に仕上げた」。それぞれの神社の神職と何度も意見を

交換しながら、北村がデッサンを描き、干支土鈴につくり上げたものだ。「神職さんに「非常に素晴らしいでき栄えですね」と言われた時が一番うれしい」と相好^{そうこう}を崩す。

神社陶器は一般に販売するものではないため、一度に制作する数が少ない。そのため、「採算的には厳しい」が、それでも北村は神社陶器づくりにこだわる。技術を高めるために、各工程ででき具合をチェックし、悪いところがあればその場で技術者たちに指摘する。

「年々、ロスが少なくなっている。新しい商品をつくり続けることで、新しい技術が生まれてくるんです」と、技術の向上に手応えを感じている様子だ。

北村夫人・みどりは北村家に嫁いだ時、義父から最初に言われた言葉を今でも鮮明に覚えている。それは「商売をしているが、商売ではない。神社にご奉仕の精神で仕事をしないとだめだ」という言葉だ。

北村夫妻は父親の教えを胸に刻み、古くから伝わる神社陶器の技術を守り続けている。

(敬称略)